
旅人の彼女は魔法少女に会う

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人の彼女は魔法少女に出会う

【Nコード】

N4792Z

【作者名】

流星

【あらすじ】

次元の旅人である彼女は新たな刺激と世界を求めて旅をする。

そうして目指したのは地球。ファンタジーな世界観ではなく普通の世界を求めたのだが、気づけばあの人に絡まれ、そうして始まる物語。

彼女の名は——菜乃葉。よもやこの時は自分と同じ名前の小さな少女と出会う事になるとは思いませんでした。

別の作品のオリキャラによるリリカルなものです。苦手な方は回れ右を推奨いたします。

旅人、その世界へ（前書き）

初めましての方、初めまして。そうでない方はこんにちは。
流星です。

今回は以前の夏ごろから妄想し始めたものをこうして具現化させて
しました。

MHBより登場いたしますキャラをリリカルなのはの世界に介入さ
せるという、やってしまった感のある物語の始まりです。

どこまでいくのかわかりません、どうなってしまうのかもわかりま
せん。

見苦しい展開になるでしょうが、お付き合いいただければ幸いです。
そして彼女となのは達の物語を少しでも楽しんでいただければと思
います。

旅人、その世界へ

静かな空間に響く一定周期の音。庭園にある鹿威しししおどの鳴る音だ。それに耳を傾けながらその家の主は静かに晩酌を楽しんでいる。つまみは燻製された肉、サラダ……酒もつまみも彼女の故郷にあるもので用意されたもの。

それを口に運びながら縁側に腰掛ける一人の少女は庭に咲く桜の木々を眺めていた。

この家には彼女一人しかない。

純和風の庭園には鹿威しが鳴り、それに合わせて水が小川へと静かに流れ落ちる音も僅かに耳に届けてくる。それ以外の音はなく、静かに揺れる桜の花と落ち着いた色で作られた穏やかな風景を醸し出す庭園。

まさに和の光景。

それを一人で眺めながらの晩酌と言うのはなかなか乙なものだ。しかしそこに空はない。

いや、空と呼べるかどうかも怪しい。なにせその家の外には、普通では見られない星空があるのだから。

《航海は順調です。魔力残量も問題なし、かの世界領域からは完全に離れました。菜乃葉様、これよりどちらへ参りましょうか？》

「どこでもいいわ。……でもそうね、今度は“普通”に近い世界がいいかしら」

《かしこまりました。航海、続行しつつデータを検索いたします》

聞こえてきたのは女性のような声。だが声はしても姿は見えない。そして航海という意味は普通に海を移動するというものではない。

いや、海と意味を取って言えばこれもある意味海だろう。ただ「次元」の海、という意味になるが。

外に見えるのは幾多もの世界の欠片。欠片の中へと入りこめば、そこには世界の数だけの姿があり、物語が存在する。

様々な世界を渡り歩く彼女の名は――菜乃葉。

故郷の世界にて人族と言う存在から外れた孤高の狩人^{ハンター}である。

彼女の故郷は竜種が存在し、人の中には彼らと戦い、狩る者が存在している。

人、それをハンターと呼び、日々命を懸け、身を削る戦いが世界のどこかで行われている。

かの世界はまさに狩るか狩られるか、というルールが存在していた。弱肉強食、その原始的なルールの下、あの世界で生きる命は戦い続けている。そうして己の力を高めたり、名を挙げたり、あるいはそれで日々の生活の糧を得たり、自分の住まう場所を守ったりしているのだ。

そんな世界から離れ、菜乃葉は気の向くままに次元世界をこの家で航海し、旅をしている。

彼女の故郷は本来このような技術はなかったのだが、その幾多の平行世界の一つにこの技術が発展する可能性を秘めた世界が存在していた。彼女はその技術、すなわち魔法の才能に恵まれ、しかしそれだけではない才能にも恵まれた事により普通ではない存在へと至ってしまった。

それは同時に普通の人では生きられない程の長い年月を生きる存在となったという意味でもあり、本来の寿命以上の時を彼女は生きている。

今ではこうして次元世界を旅し、様々な世界で過ごした時間の方が故郷の世界で生きた時間を超えてしまう程に。

もちろんただの家がこんな次元を航海できるはずもない。純和風の家ではあるが、家のどこかには魔力を溜めこむ場所と同時に次元航海をするための術式を組んだ物が存在し、それを制御する意志が

ある。

それが先ほど聞こえてきた声の主であり、実体を持たず溜めこまれた魔力によって次元航海を安全に行うための、いわばプログラムのような存在である。

全ては菜乃葉によって作られたもの。ここまでやるのに長い年月をかけたが、そうするだけの意味はある。

あの世界だけで過ごすのは退屈だ。他の世界の存在を知り、長く生き続ける彼女が退屈しない物語を観劇しようと菜乃葉はこの果てのない次元の海に身を投じた。

（さて、次はどのような物語に出会えるのかしらね）

思い返してみると今までの世界は少々ファンタジー色が強いものばかりだった。故郷もファンタジーといえばファンタジーではあるが、最近旅してきた世界もそれに似通っている。

前回旅した世界は大魔王が存在していたし、その前はモンスターを捕まえて育てて戦わせる世界。その前は有名な聖樹とそれから生み出される力を求めてやってきた他の星からやってきた敵、それが率いる魔物の軍勢と、その星に暮らす人々による長い戦争をしていた世界と……我々が知る普通の世界とは少し離れた世界観ばかりだった。

それが続いてきたため、菜乃葉は彼女にああいうリクエストを通じたというわけだ。

主の命に従い、彼女は進路を決めて新たな世界を求めて次元を渡っていく。

《検索完了。ここより近い場所ならば一つの世界が該当いたします。まずはそちらに向かいますか？》

「データを」

グラスを置いた菜乃葉の眼前にホログラムのように浮かび上がる一つの画面。

その画面の一番上に書かれた文字はこうあった。

地球。

「地球、か。久しぶりね」

水の惑星とも呼ばれる青き星。自分の故郷もその星ではないかという事が数多の世界を渡り歩いた事で何となく浮かび上がった推測だ。その割には世界観が全く異なっているのではないかと思うだろうが、その星全体の地図を見た時、陸地の形が妙に地球とよく似ているという事がわかった。

地球の過去の姿に竜種を付け加えていけば、もしかすると重なるのではないかという程に。

とはいえこれはあくまでも彼女の推測であり、絶対にそうだとは言いい切れないのだが。

ひとまず故郷の事は置いておくでしょう。

これから向かう地球はどうやら科学が発達した世界であり、ファンタジーの色はまったくと言っていい程見当たらないようだ。だからといって退屈になる、というわけではない。ファンタジーがなくても物語は紡ぐ事は出来る。

それにそれがなくとも、その裏では何かがあったりするものだ。

世界には表と裏が存在する。一見普通の世界だったとしてもその裏では何かが起こっているのが常。

それに期待してみる事にしよう。

「いいわ、そのまま進みなさい」

《かしこまりました。では地球へと向かいます。航空続行、時空跳躍、開始》

次元の海と時空の壁を割り、別世界へと渡っていく。今まで見えていた世界の欠片とはまた違う欠片たちの星が背後へと流れていくのを感じながら、その時を期待しつつ菜乃葉は晩酌を進めていった。

○

一次元次元の海に浮かぶ一つの居城がある。

時の庭園、ここはそう呼ばれている。

この居城の主であるプレシア・テストロッサはウェーブがかった黒髪をし、黒や紫色という暗い色合いをしたドレスを身に包む妙齡の女性だ。彼女はこの時の城の奥にある一つの場所に佇んでいた。彼女の前には一つの生命ポッドがあり、その中には裸になっていた一人の少女が浮かんでいる。金髪のツインテールをした少女だ。まるで眠っているかのようにその成体ポッドに満たされた液体に包まれている。

そんな彼女を見つめていたプレシアは突如彼女を呼ぶ声に反応する。

『警告。何かが接近してきております』

「接近？ 映しなさい」

そう指示すればプレシアの前に一つの画面がホログラムとなって映し出された。そこにあったのは和風の家がこの次元の海を移動している姿だった。その進路はこの時の庭園へと近づく航路。

それを見たプレシアは目を細めながら憎らしげにその家を見つめる。

「こんな所に次元を移動する家？ ……しかもここを航海するなんて、まさか嗅ぎつけてきた？」

もし管理局の者達ならばマズイ事になる、とプレシアは苦々しい表情を浮かべた。もし自分の事を調査しに来たとなれば、後々の事に響くだろう。自分の目的達成が果たされないとなれば自分のこの長い時間が無意味なものになってしまう。

それだけは避けたい。

プレシアは軽く生命ポッドに触れて優しく撫でると、背を向けてその場を後にする。向かった先は玉座の間。そこにある玉座に腰掛けると、相変わらず接近してくるあの家を見据えて杖を握り意識を集中する。

「この初撃で沈んでもらいたいものだけけど」

眩きながらプレシアは一つの魔法を構築していくのだった。

○

時空航海を始めて数時間後、辿り着いたのは一つの次元空間。緩やかに航海するその家を操作している意志はその存在を捉える。

《菜乃葉様、前方に一つの物体を確認いたしました。人の反応あり、このこと同じく次元航海を可能とするものでしょう》

「……へえ？ 見せてちょうだい」

そうして映し出されたのは一見禍々しさを感ぜさせるものだった。一つの島の上に鋭利に尖った石の山が幾つも聳え、その中心の奥に

居住空間があるらしい。

それにしてもこんな所で自分と同じように次元の旅人と遭遇しようとは、これも何かの運命なのだろうか。

菜乃葉はそう考えたが、どうも移動している気配がない。

《あれはどうやらあそこに留まっている模様です》

「ふーん……………ん？」

旅人ではないのか、と思った矢先、あの居住空間から魔力の高まりを感じた。

つまり魔法行使の気配。

それを感じとった菜乃葉は思わず口元に笑みを浮かべてしまう。グラスを傾けて注いでいた酒を一気に飲み干すと、口元を拭いながら立ち上がった。

「どうやら、歓迎はされていないようね」

そんな言葉と共に次元の海から一筋の光が放たれ、家に届く前にこの家全体を包む障壁に直撃し、その衝撃で軽く庭園の木々が揺れた。眩い光と共に響く轟音はあの光が雷系統である事を教えてくれた。

その軌道から次元の海に引きこされる雷によるもの、と思わせるかのような攻撃方法だった。あの城からのものではなく自然現象と誤認させる攻撃方法だったが、菜乃葉はそうではないという事を理解した。

あの攻撃は人の手による魔法。あるのかどうかはわからないが居住空間に取り付けられた攻撃武器によるものでなく、あそこに住まう術者によって引き起こされた攻撃。それだけで術者の力量がわかる。

何せここは一つの世界の中ではなく次元空間だ。この次元の狭間

で魔法行使をするという事だけで、どれだけの魔力を消費するか想像もつかない。

「……というか、次元を超えての雷魔法とか、あの女を思い出させてくれるわね。これは一つ、挨拶しにいけないといけない、か」

冷たい笑みを浮かべながらも攻撃された事は気にしていない。ただその攻撃方法が彼女にとってあまり思い出したくない存在を頭に浮かばせてしまったために、彼女の笑みはより一層笑みが冷たくなっている。

《空間座標、割り出し終了いたしました》

その言葉の後に菜乃葉の周囲の魔力が動き、彼女の姿はその場から消え去った。

○

「侵入者？ ああ攻撃も耐えきったようだし、出来るようね。……何者？」

呟きながら時の庭園に侵入してきた彼女の姿を映し出す画面を見つめる

この時の庭園に仕掛けられているセンサーによって映し出されたのは、入口に佇む幼い少女ただ一人。

闇より深い黒曜の髪は背中に届き、外見的から年齢を読みとってみるとおよそ9〜12歳ほどだろうか。奇しくも自分が生み出したあの少女と同じくらいの年齢だ。

そして彼女の服装はなかなか独特なものだというのがわかる。

肩を露出した薄い紺色の和服を藍色の帯で締め、その上に黒い羽織を着ている。下は黒色をした袴ではなく、膝の辺りまでの長さをしたスカートのようなものがなびき、白い帯で締められていた。

だというのに履いているのは黒いブーツに近しいもの。見事にその服装に合っていない履物だ。だが彼女にとって和服のイロハなど知る由もないので服装に関して特に何かコメントはしない。

その口から出るのは彼女のその外見からわかるその若さだった。

「まさか……これほど幼い小娘だとはね。しかも他に戦力なし？でもここに入り込んだからには何かあるんでしょうね。……いいわ、迎撃しなさい。招かれざる客は退場してもらわないといけないしね」

手にしている杖を軽く振るうと入口に無数の鎧が出現していくではないか。その数は……目算できるだけで二十を下らない。この時の庭園を守る兵士、傀儡兵。魔力で動く無人の兵士であり、ある意味この庭園の兵器とも呼べる存在だ。

さあ、さっさと侵入者には消えてもらい、目的を果たすための調査を進めなければ。

自分の道を阻む者ならば、誰であろうとも排除するのみ。

旅人、その世界へ（後書き）

菜乃葉、彼女は元の作品ある程度は情報があります。

そしてあちらとの時系列関係は謎とさせていただきます。

はたして彼女は一体どういう風に関わっていくのか。

しばらく書き溜めはありますが、その先は更新は不定期になるでしょう。

何とか進めていきたいと思います。

これからよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4792z/>

旅人の彼女は魔法少女に会う

2011年12月16日04時53分発行